

目次

- 1 今後のベルギー研究会について
- 2 研究会の記録
- 3 コラム
- 4 研究会会員一覧
- 5 会員刊行物
- 6 今後の予定



今後のベルギー研究会について

1) 事務局の名称変更

会員もおかげさまで増えてきましたので、今後の渉外活動や研究会運営の安定化を考慮し、これまでの「事務局」を以下の体制(名称)に変更いたしました。担当者と役割分担は当面これまでの継続です。また会自体もこれまでとまったく変わらず、自由で気楽な雰囲気の中で続けて行きたいと思います。

会長 岩本和子(渉外、例会運営他)

副会長 石部尚登(ウェブサイト管理)、三田順(例会運営他)

運営委員 井内千紗(書記)、今中舞子(会計)、小林亜美 鈴木義孝 中條健志(例会運営他)

例会運営はじめ、論文集、翻訳企画その他、ベルギー研究に関連する諸活動についての担当(連絡)をいたします。今後とも研究会のみなさまのご協力、ご参加、あるいは新たな活動のご提案などもよろしくお願いいたします。

2) 今後の研究会開催について

2015年度以降は、原則、年4回開催します。(7月ごろに東京、3月にブリュッセル、あとの2回は原則関西)

3) 2016年はベルギー・日本修好150周年

ベルギー大使館および日本ベルギー学会(会長北原和夫先生)と連携し、ベルギー研究会としても記念行事を企画します。大使館、学会との同意を得ており、2016年秋頃の記念シンポジウム(日本ベルギー学会、ベルギー研究会共催)、日白交流に関する書籍の翻訳出版などを考えております。

研究会の記録

2014年1月～12月

2014年は関西で2回、東京で1回、ブリュッセルで1回の開催に加え、初めて名古屋での研究会も開催しました。また、第57回の研究会ではルクセンブルク学研究会との合同セミナーも開催しました。

第51回研究会

日時: 2014年2月9日(日)13:30～17:30

会場: 西宮市大学交流センター 講義室1

「マグリットにおけるベルギー/ベルギーにおけるマグリット」

利根川由奈(京都大学)

「ベルギー象徴派のウィーンとスロヴェニアにおける 受容」

三田順(学振特別研究員 PD)

発表要旨

「マグリットにおけるベルギー/ベルギーにおけるマグリット」

利根川由奈

ベルギー出身の画家、ルネ・マグリットを巡る美術史上の先行研究は、彼の作品をたびたびベルギー的な絵画として取り上げてきた。その理由は、主にフランドル美術とのつながり、ベルギーの表象の2点において、マグリットの絵画にはベルギーを指し示す要素が多く含まれていると考えられてきたためだ。しかしながら、彼の作品と言説からは、彼がベルギーとの連関を示そうとした痕跡を見出すことは難しいと言える。上記のように考えられるにもかかわらず、マグリットの生み出したモチーフは今日、彼の母国であるベルギーのアイコンのように扱われている。ではなぜベルギーではマグリットのモチーフがベルギーの国の象徴のように扱われるようになったのだろうか。本発表ではこの点を明らかにするため、マグリットの制作におけるフランドル美術やベルギーの表象との連関と、ベルギー国家によるマグリットの受容を参照点として考察を行う。

第52回研究会(ブリュッセル)

日時:2014年3月5日(水)13:00～19:30

共催:神戸大学異文化研究交流センター(IReC)

<第一部> 会場:神戸大学ブリュッセルオフィス、時間:13:00～16:30

【発表】

「我々と奴ら」の変容

石田まりこ(ブリュッセルインター校)

「公的権力の存在を前提としない「事実上の正書法」の固定化」

石部尚登(日本大学)

「独立後のベルギー王国におけるナショナル・アイデンティティ形成への音楽の関与—ブリュッセル王立音楽院の音楽理論教育に焦点をあてて—」

大迫知佳子(日本学術振興会海外特別研究員・ブリュッセル自由大学(ULB))

「聖なる画中画—ペトルス・クリストゥス作《若い男性の肖像》に描かれた「聖顔」と贖宥—」

杉山美耶子(ヘント大学)

< 第二部 > 会場: シャルリエ美術館、時間: 18:00~19:30

【講演】

「ベルギー美術史」の諸相—初期フランドル派からシュルレアリスムまで—(英語)

利根川由奈(京都大学)

「ブリュッセル芸術サロン<自由美学>とマーテルランクとその周縁」(フランス語)

正木裕子(ベルギー王立ブリュッセル音楽院)

【演奏会】 ブリュッセル王立音楽院声楽科 正木研究室

※演奏会については p.11~13 のコラムとプログラムをご参照下さい。

発表要旨

「我々と奴ら」の変容

石田まりこ

本発表では、ベルギーの労働組合に焦点を当て、1997年と2001年、2010年という時系列で、日系企業における組合との労使関係の事例研究を報告する。

日本的雇用システムの一つとされる企業別労働組合による労使関係を有する日本企業が、ベルギーの子会社で戸惑うことの一つが、労使の対決的な要素を含む労働組合との関係である。日本本社の中には、ベルギーの労働組合は、既得権にしがみつく利己的な集団と捉える場合もある。

欧州の労働組合の組織率は、低下傾向にあると指摘されている。しかし、ベルギーの労働組合は、ドイツやオランダの労働組合がストライキの回避を特徴とし、組織率が19%台であるのとは異なり、組織率は50%台を維持している。しかし、企業を超えて横断的に組織された労働組合が、2014年にホワイトカラーとブルーカラーが同一の労働組合となり、現在、変容している。

公的権力の存在を前提としない「事実上の正書法」の固定化

石部尚登

正書法の確定は言語計画の重要な一段階であり、通常それは公的権力またはそれに準ずる言語アカデミーを通して行われる。しかし、多くの少数言語では、そうした公的権力の介入とは無縁であった。本発表では、ベルギーのワロン語を事例に、正書法不在の時期とされる18世紀においても、繰り返される辞書の刊行により「事実上の」正書法の収斂がみられたことを示し、公権力の介入も言語運動の存在も前提としない規範化の一端を明らかにする。

独立後のベルギー王国におけるナショナル・アイデンティティー形成への音楽の関与—ブリュッセル王立音楽院の音楽理論教育に焦点をあてて—

大迫知佳子

ブリュッセル王立音楽院は、革命を受けて一次的に閉鎖された王立音楽学校を引き継ぐ形で、1832年に開校した。この開校には、国王レオポルド一世、ベルギー政府、そして音楽院初代院長フランソワ＝ジョゼフ・フェティスがともに目指す音楽文化の在り方が関わっていた。すなわちそれは、かつて芸術分野においてこの地域が占めていた高い地位を新国家の下で回復させるというものであった(Vanhulst 2008:127)。従って、新しい国家を打ち立てていく際に重要視された事柄のひとつとして、音楽院を拠点としたベルギー独自の音楽文化の再興があったと考えることができる。

本発表は、ブリュッセル王立音楽院でフェティスが行った音楽理論教育に着目し、独立後のベルギーにおけるナショナル・アイデンティティーの形成に音楽がどのように関与したのかを探る試みである。このため発表では、1832年の音楽院開校から30年間の1)規約、2)運営に関する行政記録、3)コンクールの受賞者名簿、4)コンクール受賞者によるコンサートのプログラム、5)附属図書館蔵書カタログ、という5種の資料中の音楽理論関連事項に見られる、ベルギーと諸外国の関係を通して考察を行う。

聖なる画中画—ペトルス・クリストゥス作《若い男性の肖像》に描かれた「聖顔」と贖宥—

杉山美耶子

本発表では、ペトルス・クリストゥスによる《若い男性の肖像》(1460年頃、ロンドン・ナショナル・ギャラリー所蔵)に画中画として描かれた「聖顔」に着目し、その機能を贖宥という観点から検討する。贖宥とは、現世で犯した罪の重さに応じて、死後に煉獄で受けなければならない懲罰の時間軸における軽減を意味する。贖宥と芸術作品の関係は、近年になり徐々に注目されるようになったテーマであるが、初期フランドル絵画の領域においては等閑視され続け、未だ体系的な検討は成されていない。ペトルス・クリストゥス作品に関しても、この画中画と贖宥との関係は一部言及されては来たものの、詳細な検討は試みられては来なかった。そこで本発表では、はじめに「聖顔」の基本情報及び図像的特徴を確認した上で、この図像に関連付けられた贖宥祈禱文について検討する。その後、本作品に描かれた「聖顔」が、画中の祈禱者の私的礼拝時における贖宥図像として機能したと同時に、作品全体の意味内容にも関連している可能性を提示する。

第53回研究会

日時:2014年5月11日(日)13:30~17:30

会場:西宮市大学交流センター講義室1

【発表】

「世紀末ベルギー文学におけるフェミニズム精神の受容」

岡本夢子(京都大学)

【映像鑑賞】

Tintin et moi [2003]

発表要旨

「世紀末ベルギー文学におけるフェミニズム精神の受容」

岡本夢子

19世紀末のベルギー文芸誌についての研究は、ベルギー文学のアイデンティティの問題や、世紀末の様々な文学運動の枠組みを軸に行われてきたように思われる。ベルギー文芸誌の代表である *La Jeune Belgique*、*L'Art Moderne* 両紙はしかしながら、象徴主義という言葉が盛んに人々の口にのぼる以前から新聞を発行しており、創刊当初から美学を模索中のパリの詩人たちの作品を掲載、あるいは紹介していた。そこで、フランスでの文学運動の形成を促した文学キャバレーあるいはカフェが発行した新聞と、同時期のベルギー文芸誌との関わりを明らかにし、象徴主義前史におけるフランス、ベルギーの交感をひも解いていきたい。中でもモンマルトルの芸術キャバレー *Le Chat Noir* が発行した新聞(発行期間1881年~1897年)に投稿していた作家たちはベルギー文芸誌にも関わっており、その関連性に着目している。*Le Chat Noir* 周辺で新たな芸術を目指した若者たちが既存の芸術を打開する精神を表したものに「フェミニストリー」という言葉があるが、今回はこの「フェミニストリー」を概説した上で、ベルギーの文芸誌にどう受け取られたかを論じる。

第54回研究会

日時:6月15日(日)15:00~17:30

会場:西宮大学交流センター セミナー室1

【映像鑑賞】

Le gamin au vélo (少年と自転車) [2011]

第55回研究会

日時:2014年7月27日(日)13:30~17:30

場所:明治大学 研究棟4F 第三会議室

【発表】

「ポール・ヌジェのルネ・マグリット論—視覚をめぐる主題の断絶と連続」

吹田映子(筑波大学)

「ベルギーの絵本における“死”と“グリーフ(喪失悲嘆)”—オランダ語圏とフランス語圏の表現の違いを比較して」

野坂悦子(東京成徳大学)

「ベルギーにおける無形文化遺産の目録作成について—ユネスコ無形文化遺産保護条約の影響」

井内千紗(東京文化財研究所)

発表要旨

ポール・ヌジェのルネ・マグリット論—視覚をめぐる主題の断絶と連続

吹田映子

1943年、ポール・ヌジェ(1895~1967)の『ルネ・マグリットあるいは擁護されたイメージ』が当初の予定より十年遅れて上梓される。全十一章中六章はすでに1933年、パリのシュルレアリスム機関誌上に掲載されていた。本発表はこのタイムラグに注目し、ヌジェとマグリットとの関係の変化を考察したい。「見ることは行為である」と主張し、1920年代後半から30年代前半にかけて視覚を主題にブルジョワ的秩序の転覆を目論んだ彼らの緊密な「共犯」関係は、第二次世界大戦の勃発とともに途絶する。ヌジェはシュルレアリスムの活動の表舞台から消え、代わりにマグリットが主導的立場に立つ。後者が従来の写実主義的作風を否定しフランス印象派風の制作に着手したのはこの趨勢の中であり(1943~1947)、ヌジェのマグリット論は奇しくもこの時期に刊行された。だが画家の新様式に対しヌジェが懐疑的であったからといって、必ずしもそこに断絶を見るべきではないだろう。なぜなら新様式を理論的に正当化する文書の中でマグリットは「切り離し *isolement*」という、かつてヌジェとの議論において最も基本的な視覚的手法に位置づけられた概念を再び持ち出し、ありうべき世界認識の枠組みとして踏襲しているからだ。

ベルギーの絵本における“死”と“グリーフ(喪失悲嘆)”—オランダ語圏とフランス語圏の表現の違いを比較して

野坂悦子

オランダに続いて、安楽死法が世界でも早い時期(2002年)に可決されたベルギーでは、今日、

絵本出版の世界でも、「死」をタブー視することが少ない。喪失悲嘆(グリーフ)をケアする観点から、子どもたちに必要なものとして、友だちや兄弟姉妹の身近な「死」をむしろ意欲的に描いている。しかし「死」をどう伝えるかは、きわめてデリケートな問題である。メンタリティの違いを反映して、オランダ語圏とフランス語圏では同じストーリーであっても、エピソードや言葉遣いが大きく異なる場合がある。今回の発表では、『レアの星』(仏語原題:L'ETOILE DE LEA、蘭語原題:EEN STER VOOR AMBER、邦訳くもん出版)を中心に、二つの言語による表現の違いを比較し、さらに日本では何が違和感となるのか、検討したい。さらに死をテーマにした他のベルギー絵本、『エヴァはおねえちゃんのいない国で』(くもん出版)、『弟のビー玉』(大月書店)、『でも、わすれないよベンジャミン』(講談社)、『ちいさな死神くん』(講談社)も紹介する。

ベルギーにおける無形文化遺産の目録作成について—ユネスコ無形文化遺産保護条約の影響—

井内千紗

ユネスコの無形文化遺産の保護に関する条約(2003年採択)は、ベルギーにおける各共同体政府の文化政策に「無形文化遺産」という概念の導入をもたらした。今日、各共同体では条約の理念にならい、無形文化遺産の担い手やコミュニティを主体にした目録の作成が推進され、そのなかから、ユネスコの無形文化遺産として推薦する案件が選定されている。これまでユネスコの代表一覧表に記載されているベルギーの無形文化遺産10件は、地域色の強いものが大半を占めていたが、今後は鐘楼文化やビール文化といった、共同体の枠を超え「ベルギー色」の強い案件がユネスコに申請される予定である。本報告では、このような近年の国家レベルでの動きに着目しつつ、ワロニー・ブリュッセル連合とフランデレン、それぞれの共同体で国際規範の影響下、どのような文化要素が無形文化遺産と認識されているのか、各共同体の目録作成に注目しながらベルギーにおける無形文化遺産概念導入の影響を考察する。

第56回研究会

日時:2014年10月18日(土)13:30~17:30

会場:金城学院大学サテライト

「ベルギーの多言語地域で生きる—ブリュッセル周辺地域に住むフランス語話者への聞き取りから」

山口博史(都留文科大学)

「ラシズムを通してフランデレンとケベックを比較する」

丹羽卓(金城学院大学)

発表要旨

ベルギーの多言語地域で生きるーブリュッセル周辺地域に住むフランス語話者への聞き取りから

山口博史

ブリュッセルは蘭仏二言語圏であるが、その周辺地域である現在のオランダ語圏には、都市の成長とともにフランス語話者市民が数多く移り住んできたことがベルギーではよく知られている。大都市の周辺地域にベッドタウンが形成されることは日本でもしばしば見られることであるが、ベルギーの特徴は、現在は制度的な言語境界線がブリュッセルの周辺に形成され、属地主義的な言語政策がとられているところにある。研究会報告では、まずブリュッセルとその周辺地域の人口動態を確認し、ブリュッセル周辺地域の人口変動を把握する。その上で、さまざまな都市との比較を行なうにあたり、制度的言語境界線の存在を考慮した比較のための枠組みを提示する。これにより、他都市と比較したときのブリュッセルの特徴が浮き彫りになるであろう。しかし、社会学の観点からは行政的な制度論やそこにもとづいたベルギー社会にかんする分析枠組みを提示するだけでは十分ではない。そのため、現地フィールドワークの成果に基づき、ブリュッセル周辺地域に住む人たちのライフストーリー聞き取りからいくつかの事例を紹介したい。これにより言語境界線と都市の生活にかんする複眼的理解が可能になるだろう。

ラシズムを通してフランデレンとケベックを比較する

丹羽卓

複雑な社会構造をしているベルギーとカナダにあって、フランデレンもケベックも比較的均質な社会を形成している。そして、どちらの社会もラシズムを悪としてその根絶を目指しているが、現実にはそれは根強く残っている。そこで、まず、フランデレンとケベックという二つの社会はどのようなラシズムの問題を抱え、それにどのように対応しているのか。それを具体的に見ていく。そしてその相違は何に由来するのかを問い、フランデレンとケベックという二つの社会をラシズムという観点から比較する(といっても前者はベルギー、後者はカナダという国家内にあるので、それぞれの国の状況も無視できない)。

移民国家として成立したカナダにあるケベックが基本的に外国人を歓迎するという姿勢を持っているのに対して、ベルギーは1970年中葉までは外国人を一時的定住者と考えていたし、現在でも極右政党に代表される「外国人は帰国しろ」という意見を無視できない。また、カナダ政府もケベック政府は社会統合政策を1970年代からはっきりと打ち出しているが、ベルギーには統一的なものはなく、州や自治体によって異なっている。それは多文化主義と同化主義の間を揺れ動いている、あるいは、その混合だと言われる。本発表では、こうした歴史的あるいは社会的相違がそれぞれのラシズム問題の相違に反映していることを論証する。

第57回研究会

ルクセンブルク学研究会＝ベルギー研究会共同セミナー

日時:2014年11月9日(日)13:30～17:30

会場:西宮市大学交流センター 講義室2

【発表】

『方言』の書記化:ワロン語正書法の歴史から

石部尚登(日本大学)

「いわゆる“ライン方言(Reinisch)”の言語的特徴 —ケルン方言を中心に」

柴崎隆(金城学院大学)

「アントワーヌ・マイヤーはルクセンブルク語をどのように見ていたか」

田原憲和(立命館大学)

発表要旨

『方言』の書記化:ワロン語正書法の歴史から

石部尚登

長らくフランス語の「方言」とよばれてきたベルギー南部ワロニーのワロン語の正書法について報告する。ワロン語は、1990年に共同体法によりフランス語とは異なる「言語」であることが公的に承認され、その保護・促進が約束された。しかし、国家独立以来のフランス語とオランダ語の対立構造の下で作り上げられてきた言語制度の下で、その整備・復興は進んでいない。その一方で、その初期の文学作品は17世紀にさかのぼるなど、ワロン語は長い書記伝統を有する。また、フランス語方言学——同時にフランス語標準語の確立——に多大な貢献を果たしたベルギー人研究者の活動により、ワロン語はオイル語の中でもっとも記述・研究されてきたものの一つとされている。公的な使用が念頭に置かれることなく、地域文学や方言学(研究の)対象としてのみ存在してきたことばが、それでもなお正書法を備え得ること、またそれがどのような正書法であるのかについて論じる。

いわゆる“ライン方言(Reinisch)”の言語的特徴 —ケルン方言を中心に

柴崎隆

人口が7万にも満たないベルギーのドイツ語圏(Neubelgien)は、地域面積の点でも狭隘であるにもかかわらず等語線が入り組んでおり方言差も大きい。とりわけ北部の中心的都市Eupenの東方とSt. Vithを中心とした南部は俗にライン方言(Rheinisch)とも呼ばれるリプアール方言(Ripuarisch)に含まれている。この方言圏の中核都市ケルンは16世紀に至るまでドイツ最大の都市であるとともに、ネーデルラント方面にも強い影響力を及ぼしてきた。この発表では言語資料も豊富で低地ドイツ語と高地ドイツ語の混じり合った独特な趣のケルン方言の言

語的特徴の一端を紹介することにより、今後のベルギー東部のドイツ語方言の文法記述を促進する上で、側面から支援するヒントを提供できればと考えている。

アントワープ・マイヤーはルクセンブルク語をどのように見ていたか

田原憲和

ルクセンブルク出身のアントワープ・マイヤーは、数学者でありながらも 1829 年にルクセンブルク語による初の詩集を、1854 年には初のルクセンブルク語正書法集を出版するなど、近代ルクセンブルク語発展に大きく貢献した人物である。しかしながら、同時代人からは必ずしも高い評価を受けていたわけではなかった。本発表では、当時の時代背景を踏まえつつ、マイヤーがどのような視点からルクセンブルク語による活動を行っていたのかを検証しマイヤーの再評価を試みるとともに、マイヤーが有していた言語観についても探っていく。

ルクセンブルク語北部方言の特徴

田村建一

ルクセンブルク語の標準語はドイツ語モーゼルフランケン方言に基づいて形成されたが、北部方言にはリプアリア方言からの影響も見られ、ケルンやベルギー東部のドイツ語諸方言との共通点も存在する。北部方言は、現在でも中高年層のみならず、若年層の間でも広く用いられており、メール等の電子メディアでの使用はもちろんのこと、限られた地域内に向けたものではあるものの定期刊行物においても、この数十年以来、実用文章語として用いられている。本発表では、ルクセンブルク語話者の方言意識に関する先行研究を紹介した後、北部のヴィルツ地区およびクレルヴォー地区で刊行された雑誌等に見られる方言形の分析と現地調査を通して直接得られたデータの分析、またそれらの結果と Gilles (1999) の調査結果との比較に基づいて、方言語彙の使用が拡張しているのか縮小しているのか考察する。



第 56 回研究会の様子



第 57 回研究会の様子

コラム

神戸大学異文化研究交流センター共催 第52回研究会ブリュッセル国際大会 演奏会の記録

大迫知佳子
(日本学術振興会 海外特別研究員・ブリュッセル自由大学)

毎年恒例となっているベルギー研究会ブリュッセル国際大会(第52回定例研究会)が、今年も3月5日(水)にブリュッセルで開催された。例年通り研究会は2部構成(研究発表会および講演会&演奏会)で行われたが、昨年と同様に、本記録では第2部の演奏会を話題の中心とする。

演奏会の会場には、サン=ジョス=タン=ノード地区(Saint-Josse-ten-Noode)に在るシャルリエ美術館(Le Musée Charlier)コンサートサロンが選ばれた。このシャルリエ美術館は、19世紀に生きたパトロン、アンリ・ヴァン・キュトゥセム(Henri Van Cutsem 1839-1904)の邸宅であったもので、彼の美術品コレクションを展示するため、若き日のヴィクトール・オルタ(Victor Horta 1861-1947)が1890年に改装を手掛けた。キュトゥセムの死後は、彫刻家でキュトゥセムの友人でもあったギヨーム・シャルリエ(Guillaume Charlier 1854-1925)が建物とコレクションを引き継ぎ、1925年にはサン=ジョス=タン=ノードへ遺贈、1928年10月21日にシャルリエ美術館として一般への公開が開始されることとなる(シャルリエ美術館ホームページ:<http://www.charliermuseum.be/>)。その名もアール通りに面した美術館の入口をくぐり、19世紀後期から20世紀のベルギー人芸術家らによる美術作品の展示を抜けると、小さなコンサートサロンが現れる。サロンの中央に据えられた舞台上の古いピアノと、壁に飾られた絵画による演出も相まって、味わい深い雰囲気の中での演奏会となった(写真1)。



写真1：シャルリエ美術館コンサートサロンでの演奏会

演奏は、昨年に引き続き、ブリュッセル王立音楽院講師正木裕子先生と、その門下で学ぶ若い音楽家達が担った。プログラムには、美術館のコレクションに沿うかの如く、19世紀後期から20世紀にかけてベルギーやフランスで活躍した作曲家・詩人達の作品が集められた。

作曲家として取り上げられたのは、アンリ・デュパルク (Eugène Marie Henri Fouques Duparc 1848-1933)、アンリ・フェヴリエ (Henry Février 1875-1957)、クロード・ドビュッシー (Claude Debussy 1862-1918)、そしてブリュッセル王立音楽院の第2代目院長フランソワ＝オーギュスト・ヘファールト (François Auguste Gevaert 1828-1908) の4名であり、作詩家は、シャルル＝ピエール・ボードレール (Charles-Pierre Baudelaire 1821-1867)、モーリス・マーテルリンク (Maurice Maeterlinck 1862-1949)、ピエール・ルイ (Pierre Louis 1812-1889)、そしてヴィクトリアン・サルドゥー (Victorien Sardou 1831-1908) の4名となった。とりわけ4名の作曲家のうち、デュパルク、フェヴリエ、ドビュッシーはフランスの出身であるが、デュパルクは現リージュ出身の作曲家セザール・フランク (César Franck 1822-1890) に師事しており、フェヴリエとドビュッシーの作品は作家マーテルリンクを通してベルギーと関連付けられた。

演奏会プログラムの中で、特に印象深かった作品は次の3作品。フェヴリエとマーテルリンクによるオペラ《モナ・ヴァンナ Monna Vanna (1909)》第2幕第3場から抜粋されたモナ・ヴァンナの aria は、ドビュッシーの《ペレアスとメリザンド Pelléas et Mélisande (1902)》とよく似た部分を持つ作品として知られる。ドビュッシーとマーテルリンクによる《私の長い髪は塔の縁まで落ちて Mes longs cheveux descendent jusqu'au seuil de la tour》は、その《ペレアスとメリザンド》第3幕第1場のメリザンドの aria である。前者のエネルギッシュなソプラノと、後者の情緒溢れる伴奏に乗せた繊細なソプラノの対比が聴衆を愉しませ、心を打った。ヘファールトの《キャピテン・アンリオ Le Capitaine Henriot (1864)》は1864年にオペラ＝コミック座で初演された作品であり、この中から2曲が抜粋された(資料1参照)。特に終曲は6人のソプラノの共演となり、小さなサロンに圧巻の演奏であった(写真1)。

サロンのピアノの調律を担当したのは、このヘファールトの血縁にあたる調律師だったとか。演奏そのものだけでなく、会場となった美術館の展示品、サロンの雰囲気、演奏会に関わった人々をも通して、近代ベルギーの歴史が感じられる素晴らしい演奏会となった。2015年3月5日には、上記ヘファールトの《キャピテン・アンリオ》全幕(序曲等一部を除く)がブリュッセル王立音楽院で披露される。

* 昨年同様、素敵な演奏をお届け下さった正木先生およびブリュッセル王立音楽院の学生の皆様に、この場をお借りして心よりお礼を申し上げます。

Programme

-Henri Duparc (1848-1933)/ Charle Baudelaire(1821-1867)

« *L'invitation au voyage* » (C.1870)

Soprano Evelina Arnaúdova
Piano Vanessa

-Henry Février (1875-1957)/ Maurice Maeterlinck (1862-1949)

Extrait d'opéra « *Monna Vanna* » (1909)

Acte II , La Tante de Prinzivalle , scène III

Air de Monna Vanna «*Que les hommes sont faibles et lâche quand ils aiment* »

Soprao YingZi Zhang
Piano Tomoyo Masuda

-Claude Debussy (1862-1918) / Maurice Maeterlinck

Extrait d'opéra « *Pelléas et Mélisande* »(1902)

Acte III , Scène I , Une des tours du château

Air de Mélisande « *Mes longs cheveux descendent jusqu'au seuil de la tour* »

Soprano Sachiko Kinébuchi
Piano Tomoyo Masuda

-Claude Debussy / Pierre Louÿs (1812-1889)

Extrait de *Trois Chansons de Bilitis* « *La Flûte de Pan* » (1897)

Soprano Janelle Lucyk
Piano Tomoyo Masuda

-Claude Debussy

Sonate pour violoncelle et piano ré mineur (1916)
Finale (III ème mouvement)

Violoncelle Thibault Seiller
Piano Tomoyo Masuda

-François August Gevaert (1828-1908) / Victorien Sardou (1831-1908)

Extrait d'opéra « Le Capitaine Henriot » (1864)

Acte I Scène IV Paris en 1594, le camp du roi sur les hauteurs de Bellevue
No.2 Duetto de Blanche et Valentine « *Aux soupir des zéphirs* »

Soprano Wei-lian Huang
Soprano Janelle Lucyk

Acte II Scène II Salle à l'hôtel d'Etianges . On voit au loin le vieux Louvre éclairé par la lune.
No.9 B Air de Blanche , avec le chœur dans la coulisse

« *Chansons , Rondeaux, Galantries, Riches joyaux ,
je vous défie de faire un instant que j'oublie celui que j'aime pour la vie* »

Sopranos : Evelina Arnaúdova, YingZi Zhang , Sachiko Kinébuchi ,
Janelle Lucyk , Wei-lian Huang , Hiroko Masaki

資料1：演奏会のプログラム（正木裕子先生提供）

今後の活動予定

2015年の研究会活動の予定は以下のとおりです(2月22日時点)。

第58回研究会(関西)

日時:2015年2月22日(日)13:30~17:30

会場:神戸大学国際文化科学研究科 E棟3階 E325

[研究発表]

「メーテルランク『青い鳥』に関する言説についての一考察」

内田智秀(名城大学)

「ワロニーにおける象徴主義受容と〈北方〉アイデンティティの形成」

三田順(北里大学)

[映像鑑賞]

『パトラッシュ、フランダースの犬』(2008) [1h25] オランダ語(+日本語字幕)

第59回研究会(ブリュッセル)

日時:3月4日(水)13:30-18:30

会場:神戸大学ブリュッセルオフィス

[研究発表]

「ベルギーにおける言語の輸入と輸出」

石部尚登(日本大学)

「19世紀末ベルギー、フランスの文学新聞における交流について(仮)」

岡本夢子(京都大学・リエージュ大学)

「ベルギーにおける「移民問題」の歴史」

中條健志(大阪市立大学)

「ルネ・マグリット制作の王立施設の壁画・天井画に関する一考察—マグリットとベルギー教育省の協力関係を背景に—(仮)」

利根川由奈(日本学術振興会研究員)

「大森荘蔵の物と心の理解について」

Pierre Bonneels(ブリュッセル自由大学(ULB))

「ヒズメット運動信奉者による学校建設と運営——ベルギーにおける事例(仮)」

松井真之介(神戸大学)

La Réception du symbolisme belge à Vienne. Le cas de Stefan Zweig

三田順(北里大学)

[特別講演]

François-Auguste Gevaert (1828-1908): his life and his work Le Capitaine Henriot

大迫知佳子(日本学術振興会海外特別研究員・ブリュッセル自由大学(ULB))

第60回研究会(関西)

日時:2015年5月

会場:未定

語学教育に関するディスカッションを行なう予定です。通常通り研究発表も募集しています。

第61回研究会(関東)

時期:2015年7月頃

第62回研究会(関西、名古屋または九州)

時期:2015年秋

第63回研究会(ブリュッセル)

時期:2016年3月

※第60～63回の研究会での発表を受け付けております。発表をご希望の方は岩本までご連絡下さい。

ベルギー研究会 会報 3号

Newsletter of Japanese Association for Belgian Studies, Vol. 3

発行：2015年2月

編集：井内千紗

事務局：神戸大学大学院国際文化学研究科 岩本研究室

ウェブサイト：<http://www40.atwiki.jp/kbek/>